

博報財団 第10回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名 (在住国名)	鶴谷 千春(ツルタニ チハル) オーストラリア
所属・役職	グリフィス大学 准教授
招聘回(招聘研究期間)	第10回(2015年9月1日～2016年2月18日)
受入機関	国立国語研究所
招聘研究テーマ	丁寧さに表れる日本語プロソディの研究 ーより効率的なコミュニケーションのためにー
研究目的	日本語学習者の増加に伴い、初級以上のレベルでの円滑なコミュニケーションがより必要になってきている。日本語の基本的な高低アクセントを学んだ後、学習者はそれをどうつないで、母語話者の抑揚に近づけるのか、各自の試行錯誤に任せられ、まとまった指導を受けていない。文レベルでのイントネーションの指導を目標に、場面別に母語話者が使用する韻律的特徴、イントネーションの表示を試み、日本語教育に役立てることを目的とした。
研究概要：	<p>本研究は丁寧さを表現するために母語話者が用いている韻律的特徴を調査し、日本語学習者の発話との比較後、学習者により良いコミュニケーションのための方策を指導して行くことを目標とした。東京在住の日本語母語話者と英語を母語とする日本語学習者に「です・ます」表現の同じ文を丁寧に話す必要がある場面とそうでない場面で発話してもらい、それを別の母語話者に聞かせ、丁寧度の評価点をつけ、音響分析の結果と照らし合わせた。</p> <p>まず、丁寧さを引き出すための例文とその状況設定に時間を割き、録音者が確実に丁寧なものとはそうでないものの違いを表現できるよう考案した。その後母語話者、非母語話者の収録協力者を募り、計40名程度の収録を終え、分析に適切とされた録音を用い、音響分析を行った。母語話者は首都圏在住の60代までの会社員及び研究員、非母語話者は英語圏からの留学生で、首都圏の大学で1年間の交換留学中の日本語のレベルは中級程度の学生だった。音響分析は、声の高さの平均、音域、発話速度、イントネーションの抽出、文末の音節の長さやピッチの動きに対して行われた。音響分析のためのアノテーションにかなりの時間がかかったが、全行程を3か月余りで終え、その後その中の聴取に適した音声ファイルを使って、他の母語話者による丁寧度判断テストを行った。約一か月をかけ、240音声ファイルをランダムに表示するプログラムを作成、聴取実験参加者にメールによる送信、結果の返信を入力後、分析の行程を終了した。最後に音響分析の結果と丁寧度のスコアを比較することで、丁寧さを上げる要因の同定を試みた。分析結果と考察は国立国語研究所の論文集と海外の学会(Interspeech 2016 - San Francisco)に論文として提出された。</p> <p>丁寧さの判断は音声だけでなく、発話がなされた文脈、状況、話し手と聞き手の関係など、様々な要因によって決定される。その複雑さから、重要さが認められているにも関わらず、丁寧表現の韻律はあまり取り上げられてこなかった。しかし、今回の研究ではこれらを考慮しつつ、同一表現を二つの異なる状況で用いる設定を考え、丁寧さを表す韻律の抽出を実現した。録音者も男女、年齢、出身を考慮して選出されている。今回の分析結果は、音声研究だけでなく、今後のポライトネス研究(Attitudinal prosody)にも貢献すると思われる。</p>
展望：	<p>集められたデータの量が多く、まだまだ様々な研究手法を用いて、異なった視点からの分析も可能である。殊に、非母語話者のデータを分析の後、今後どう日本語教育面での指導に役立てていくかは、次の研究課題の中心となるだろう。日本語教育者のための韻律ガイドとして、オンライン辞書に組み込まれること等を検討中である。</p>